

Title	日本語学習者におけるスタイル切換え能力の発達： 韓国語母語話者を対象として
Author(s)	李, 吉鎔
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45711
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	李 吉 鏞 ^{リョウキキョウ}
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19136 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	日本語学習者におけるスタイル切換え能力の発達—韓国語母語話者を対象として—
論文審査委員	(主査) 助教授 渋谷 勝己 (副査) 教授 真田 信治 教授 工藤真由美

論文内容の要旨

本論文は、韓国語を母語とする 4 名の日本語学習者を対象にして、初対面の人と話す場面と親しい友人と話す場面のふたつの場面での談話におけるスタイル切換えの実態を記述し、その切換え能力の発達プロセスを解明することを試みたケーススタディである。導入部分としての第 1 部、学習者 1 名の 3 つの習得段階における切換えの実態を詳細に記述した第 2 部、3 つの言語項目の切換え能力の発達過程を追った第 3 部より構成される。

第 1 部は 2 章よりなる。第 1 章では、本研究の目的と、先行研究をふまえたうえでの本研究の立場が述べられている。また第 2 章では、調査の概要とインフォーマント情報・談話情報、文字化の方法などがまとめられている。

続く第 2 部は、本論文の対象となったインフォーマント 4 名のうち、スタイル切換え能力の発達段階が最も顕著に観察される学習者 1 名を対象に、3 回にわたって行われた縦断調査で得られた談話資料を用いて、各期におけるスタイル切換えの実態について考察している部分である。5 章よりなる。まず第 3 章では、学習者のスタイル切換えの実態を把握するためのベースラインデータとして、大阪方言話者のスタイル切換えとインフォーマントの母語である韓国語ソウル方言でのスタイル切換えを整理している。また第 4 章では、当該インフォーマントの日本における生活ネットワークをまとめ、日本語のスタイルを習得した可能性のある場所を検討している。第 5 章から第 7 章は、それぞれ日本滞在初期、滞在中期、滞在末期にスタイル切換えの行われた言語項目を網羅的に整理した部分である。この 3 章の分析によって、当該インフォーマントには、大阪方言におけるスタイル切換えの実態を基準としたとき、(a)切換えにゆれが残ることもあるが概して目標言語話者の切換えに近似した項目、(b)目標言語話者の切換えに近づく途中にある項目、(c)目標言語話者の切換えの様相を超え、過剰に切換えを行っている項目があることを見出した。

この結果に基づき 4 章で構成される第 3 部では、さらに、日本語運用能力の異なる学習者 4 名の横断的・縦断的談話資料を用いて、上記(a)~(c)の代表的な項目である人称表現(第 8 章)、丁寧形式と普通形式(第 9 章)、接続表現(第 10 章)の 3 つの言語項目を取り上げて、学習者におけるスタイル切換え能力の発達過程、および発達に関する要因の解明を試みている。その結果、スタイル切換え能力の発達段階には、標準的な日本語教育で教えられた形式のみが表出される〔学習言語の複製期(切換え能力の未習得期)〕、学習言語の複製期から脱却し、目標言語体系に向かう過程で学習者独自の体系を作り上げている〔独自体系構築期(切換え能力の習得途上期)〕、目標言語話者と同様の切換えを行っている〔目標言語体系期(切換え能力の習得期)〕の 3 つのステップがあることを見出した。また、

とくに〔独自体系構築期〕に焦点をあてて分析した結果、韓国語を母語とする日本語学習者は、母語の社会言語的な規範をベースにしてスタイルを切換えようとする意識が強く過剰な切換えを行うこと、目標言語である日本語の言語構造の簡略化を行うこと、言語意識の過剰表出と言語構造の簡略化が衝突する場合は言語構造の簡略化が優先されることなどが明らかになった。第 11 章はまとめであり、スタイル切換え能力の習得のありかたを、「母語の社会言語的な規範をベースにして、母語の認知体系や規則、目標言語の規則を利用して、独自体系を築きつつ、切換え能力を習得していく」とまとめている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国語を母語とする、習得段階の異なる日本語学習者を対象として、そのスタイル切換え能力の発達過程を横断的にまた縦断的に詳細に分析することを試みたものである。これまでの第二言語習得研究には、文法能力の発達過程や、依頼や断りなどの発話行為能力の習得過程を分析したものはあるが、学習者におけるスタイル切換え能力の発達過程を調査した研究はほとんどなかった。

本論文は、日本語学習者 1 名の、3 つの習得段階における、初対面の人を相手にしたフォーマルな会話と親しい友人相手のカジュアルな会話の 2 種類の会話を比較して、切換えにあずかる言語項目を網羅的に整理することから出発し、その作業のなかから、(a) 切換えにゆれが残りつつも目標言語話者の切換えに近似した言語項目、(b) 目標言語話者の切換えに近づく途中にある言語項目、(c) 目標言語話者を超えて過剰に切換えを行っている言語項目の、3 つの切換えタイプを見出すことに成功している。この切換え項目の網羅的な整理と 3 つの切換えタイプの指摘は、今後のこの分野の研究にとって大きく貢献する部分である。また、日本語学習者 4 名のデータを分析した結果、この 3 つの切換えタイプを通じて、スタイル切換え能力の発達過程には、学習言語の複製期から独自体系構築期を経て目標言語体系へと進む 3 つのステップが観察され、それを「母語の社会言語的な規範をベースにして、母語の認知体系や規則、目標言語の規則を利用して、独自体系を築きつつ、切換え能力を習得していく」能動的な習得過程として一般化していることなども、今後参照されるべき貴重な知見をもたらしているところである。

ただし、問題点がないわけではない。同じインフォーマントを追究する縦断研究のむずかしいところでもあるが、各回のデータ収録の間の期間が一定しているわけではない。また、学習者は母語の社会言語的な規範や認知体系を利用するとあるが、本論文は韓国語母語話者に限定した分析であるために、転移があることを裏付ける根拠も十分に明らかであるとはいいがたい。個別の言語項目についてはさらに、一人称代名詞オレなどの使用には学習言語の複製期にあたるステップがないのではないかと、丁寧形式・普通形式の習得順序について学習者は複製期には動詞の基本形をもっていないのか、といった疑問も生じる。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、日本語学習者のスタイル切換えの実態を詳細に記述し、その発達過程を一定程度明らかにした本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって本論文は、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。